

鳥取県の美術文化を活かした題材の工夫

谷野和美

鳥取大学附属中学校 美術科

E-mail: tanino_k@tottori-u.ac.jp

TANINO Kazumi (Tottori University Junior High School) Making the most of Tottori's art culture in the classroom

要旨 — 鳥取の美術作品を扱うことで鳥取の美術文化に関心が高まり、郷土愛が育まれると考え実践した。写真家である植田正治と関連付けて、タブレットのカメラ機能を使い授業を計画した。途中、相互鑑賞することで、作品に対する感じ方が深まったと考えられるが、鳥取の美術文化について関心の高まりについては課題が見られた。

キーワード 鳥取の美術, 植田正治, タブレット, 写真

Abstract — The class was designed with the idea that students would become more interested in Tottori's art and culture and develop a love of their hometown through the use of Tottori's art works. We planned a class using the camera function of the tablet in connection with Shoji Ueda, a photographer. During the course of the class, the students were able to deepen their understanding of the works by viewing them with each other, but there were some issues regarding their growing interest in Tottori's art and culture.

Key words — Tottori art, Ueda Shoji, tablet, photo

1. はじめに

一人一台タブレットが与えられ、様々な使い方や工夫をして授業が考えられている。美術科でもタブレットを手段として使った作品制作や作品の提示の仕方などの活用が見られる。子ども達の環境ではタブレットやスマートフォンは身近なもので、操作はとても慣れている。タブレットやスマートフォンなど簡単に写真が撮れ、インターネット上にも簡単にあげることができる中、写真を使った作品や、写真そのものを作品として昇華できるのではないかと思い、その実践や効果を探った。

また、生徒はピカソやモナ・リザ、葛飾北斎など世界的に有名な美術作品や作家は知っていても鳥取県出身や身近な地域で活躍した芸術家についてあまり知らず、授業を組み立てる上でもどのように取り扱っていいか課題であった。そこで、鳥取県の美術作家について興味を広げる授業実践をしたいと考えた。

たものである。2年生に鳥取県の出身の芸術家(美術分野)で知っているかアンケートを取ったところ、水木しげるや青山剛昌、谷ロジローといったまんが家を挙げる生徒は多かったが、その他の芸術家については知っているか答えた生徒は少なかった。(図1)もしくは作品は知っていても名前を知らないという回答が多かった。ポップカルチャーは盛んになってきているが、それ以外の分野で活躍している郷土作家に興味関心を持ってもらいたいと思い、今回の授業に至った。

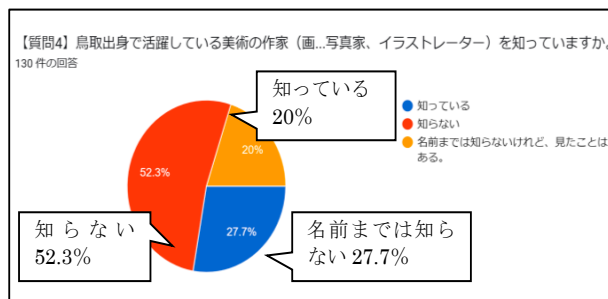


図1 2年生を対象としたアンケート

2. 授業実践

2.1 題材について

本題材は2年生を対象に4時間の計画で行っ

今回本題材の導入として取り上げる人物を鳥取県出身の写真家植田正治にした。植田正治は1930年に鳥取県西伯郡境町(現境港市)に生まれ、

生涯を山陰中心の写真を撮って活躍した写真家である。砂丘を舞台に撮影した「砂丘モード」などが知られ、独特な作品から海外からも称された写真家である。美術資料集の写真を題材にしたページに植田正治の作品が載っている。本校の生徒は様々な地域から登校しているため、一定の地域で活躍した人物より、山陰を中心に活動し、砂丘をテーマにした作品を多く残した植田正治が生徒に親しみやすいのではないかと考えた。また、タブレットを使った題材を試みたいと考え、タブレットのカメラ機能を使った授業ができないかと考えた。

2.2 授業の実際

今回実施した題材の流れを下にあげる。(表 1) 植田正治について 1 時間授業を行った後、「トリック写真」をテーマに写真を撮った。最終的に撮影したトリック写真は学級全体でロイロノートを使って共有した後、印刷したものを掲示して相互鑑賞する。

表 1 学習計画

1 次	植田正治について
2 次	タブレットでトリック写真を撮影する
3 次	相互鑑賞
4 次	トリック写真を再び撮影する

1 次の授業では、美術資料集に載っている作品で鑑賞した後、タブレットを使い他の写真を見て、気になる作品を選び鑑賞した。(図 2)

2 次の写真の撮影では、班で協力しながら個人で作品を 1 枚撮影する。班で行動することで、一人ではできない工夫も実現でき、お互いに刺激になると考えた。3 次では前時に撮った作品をお互いに鑑賞し、もっとよりよい作品にするにはどうすればいいのかお互いに意見交換をして再び撮影することにした。意見交換では、どの部分を視点に作品を鑑賞すればよいか、アイディア(表現したいこと)、構図、場所・背景、アングル、遠近感の 5 つの視点をレーダーチャートにした。相互鑑賞の時のワークシートを次にあげる。(図 3)研究授業として 3 次の授業は公開授業を行った。

あなたが気になった植田正治さんの作品は？

作品名	
工夫しているところ	工夫から感じられる効果・印象

図 2 植田正治作品鑑賞ワークシートの例

2年 組 番

①友達の写真を見て、アドバイスをしよう、または、よいところを伝えよう。

②友達の写真を見て、アドバイスをしよう。

③改善点やそのまま良かったところなど。

④ふりかえり

アイディア(表現したいこと)	構図・背景	遠近感	さん
アイディア(表現したいこと)	構図・背景	遠近感	さん
アイディア(表現したいこと)	構図・背景	遠近感	さん
アイディア(表現したいこと)	構図・背景	遠近感	さん

図 3 相互鑑賞ワークシート例

2.3 生徒の作品の変容と記述より

生徒の最初と2回目の写真を比べてみる。最初の写真では、SNSやインターネットにあげられているものに類似した作品の真似であったり、思いつきで撮ったり、背景や構図などを気にせず楽しんで撮っている姿が多く見られた。相互鑑賞をすることによって、自分だけが楽しむだけではなく、さらに驚くようなアイディアを考えたり逆光や光の加減などに意識したり、写真を見ている人のことを考えるようになった作品が見られた。(図 4・図 5)

また、一部では既存の物を使用するだけでなく、紙を加工して工夫をした生徒もいた。(図 6・図 7)他にも 1 回目と 2 回目で全く違う表現で写真を撮る生徒もいた。(図 8・図 9)



図 4 A の生徒の 1 回目の撮影

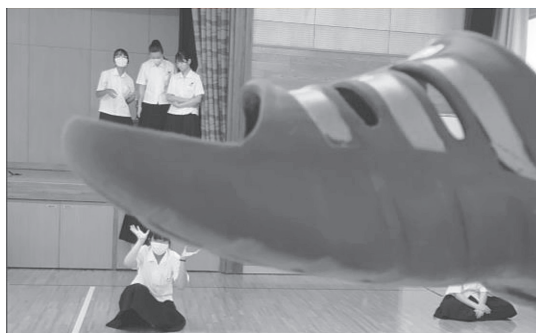


図 5 A の生徒の 2 回目の撮影



図 6 工夫した撮影



図 7 工夫した撮影



図 8 B の生徒の 1 回目の写真



図 9 B の生徒の 2 回目の写真

3 まとめと今後の課題

3.1 授業後 研究協議会より

参観者からの意見を列記する。

- ・班ごとに意見交換した後に、全体で意見を共有するために、もっと生徒の意見を上げていくことが必要ではないか。子どもたちのつぶやきの中にたくさんの気づきの種がある。
- ・2 回目に撮った写真を、どのように生徒に返すのか。テレビモニターで流したり、印刷して掲示したりするなど様々な方法が考えられる。
- ・植田正治の作品と題材が合っていない。植田正治と題材を切り離してもよかったのでは。
- ・トリック写真だと、類似した作品や工夫が偏ってしまうため、条件をしばるなどこちら側のねらいが明確にしなければならないのではないか。タブレットのカメラ機能を使った題材であれば、まだ考える余地がある。

3.2 実践の授業や研究協議会を受けて

鳥取の美術に関心を向けさせたいとねらいに位置付けたが、植田正治の良さを伝えるのが 1 時間では足り苦しかった。演出写真として、被写体を意図的に配置し、ありふれた日常の風景を、独特の構図やポーズによってシュールで非現実的な雰囲気を作り出しているなどといった特徴などを教員がファシリテーションするなどして生徒に伝える工夫が必要だったと感じる。最初は植田正治のような構図の写真を自分達が撮るという条件にしようと思ったのだが、価値観の押しつけや、植田正治の作品の良さを理解しないとただの撮影になってしまうという危機を感じ、見ている人が不思議だと感じる写真を撮ることにした。だが、トリック写真や不思議というテーマが抽象的で幅広い解釈

ができ、ゴールとなる作品が何か曖昧だったように思う。

ただ、絵の具などの表現活動が苦手な生徒やそうでない生徒も、写真を撮るという行為は楽しく、試行錯誤もしやすかったように思う。写真は簡単に何度でも撮ることができ、友達の作品を真似たり参考にしたりしやすく、頭に浮かんだアイデアをすぐ実行できるからである。ただし、関係のない生徒が写ることや、ネットなどに多くのトリック写真があるため、それらを模倣した写真も撮りやすくなるため、情報モラルの指導も必要である。

3.3 今後の課題

トリック写真を撮る時は、様々な工夫を考え、お互いに協力しながら写真を撮る姿が印象的だった。簡単に写真を撮れることから何度も撮影することができ、後からコントラストなど調整する事もできるので、取り組みやすい題材である。ロイロノートで提出をすれば、教員が全員の作品を確認することができる。学級で共有をすれば、お互いの写真を鑑賞することができるので、他の制作の場面でも活用できると考えられる。思いのままに写

真を撮るだけではなく、途中相互鑑賞し、改善点を伝え合う事で、写真を通して表現したかったことを整理することや、表現方法を工夫する生徒が増えた。広範にわたるテーマだったので、テーマをしばって取り組ませることや、写真という題材を残しながら新たな教材開発をしていくことを検討課題にしたい。植田正治をはじめとする鳥取県の実践ではこちらからの説明が多かったので、生徒自身が作品の良いところを気づかせる仕組みが必要だと感じた。また、できた作品のよいところは授業者の目線や生徒の気づきを全体に共有し、今後の制作に活かしていく必要があると感じる。2025年の3月には鳥取県初の県立美術館ができる。そこには「アートを通じた学び」を支援するアート・ラーニング・ラボ(A・L・L)の教育的普及部門がある。美術館とも連携を図りながら、授業改善に取り組んでいきたい。

参考文献

文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 美術編」.文部科学省, 2017年(東京)